

スポーツと性別

—女性確認検査／性転換選手容認の問題—

近藤 良享

(筑波大学人間総合科学研究科)

1. はじめに

スポーツ界は性別をどのように扱ってきたのだろうか。周知のように、近代スポーツが男性からはじまった故に、女性の参加は後塵を拝することになった。そして例えば、柔道競技の場合、女子を稽古（練習）には参加させても、長い間、女子競技としての参加（試合）を認められなかった例もある。柔道競技の場合に見られる男女の差異は日本独自のものかもしれないが、近年、特に国際舞台での女子のスポーツ参加は、男女共同参画の追い風を受けて、様々な障壁を乗り越えつつも、ほぼ男女同数の競技種目や参加者数になっている。

このような状況を予備知識にして、今回のシンポジウムにおいては、特に、近代スポーツの原則、女性確認検査^(注1)、性転換選手容認といった問題について、事実関係も紹介しながら、私見を述べていきたい。

2. 近代スポーツの原則

近代スポーツの原則は、端的に、「平等」である。それは、勝ち負けの「(結果) 平等」ではなく、誰もが競技において等しく扱われるという意味の「(参加機会) 平等」である。この原則に従って、平等な競い合いを困難にするような不当な不平等は、人為的に是正されることになる。競技スポーツにおいて、競技を男女別にしたり、体重別にするといった区別も、この平等原則が機能している例であ

る。そこには、男女が一緒に行うと不当になるし、種目特性による体重差が不当と判断されるために、カテゴリー分けを行うのであり、それが「平等」なのである。

冒頭に触れたように、歴史を顧みると、近代スポーツは男性によって始められ、その後、徐々に女性がスポーツに参加して、現在では種目数も参加数も同じくらいになっている。そこでの女子の参加の方法は、男性部門とは別の部門、「女性」部門を追加することによってであった。つまり、前述のように、男女を同一部門にすることが、不当な不平等と判断されたからである。しかし、かりに「女性」部門を設定せずに、男女一緒のオープン形式の競技方式だけだとしたら、女性スポーツの発展は、現在とは全く様相が異なっていただろう。つまり、女性部門がなく、男性向きの近代スポーツが継続されている限り、「女性」が五輪の場で優勝することも、メディアに取り上げられることもなく、女性のスポーツ活動そのものが相当に制限されたと推測される。その意味では、近代スポーツの「平等」原則によって、現在の女子競技の地位向上が保証されたと言えるだろう。

3. 女性確認検査

スポーツが政治的、経済的にあまり注目されず、価値を産出しなかった時代では、男女競技のどちらの部門に参加するかは、選手自身の自己申告であった。しかし、1960年代の

東西冷戦構造の影響はスポーツ界にも及び、西側諸国から、旧ソ連圏の女子選手に「男性疑惑」が生じたのである。選手が男性か、女性かについての疑惑を解消しようとして、1968年のグルノーブル冬季五輪、メキシコ夏季五輪から、ドーピング禁止規程とならんで、女性確認検査規程が登場した。しかし、この規程が施行される前には数々の疑義事例があった。

3.1 疑義事例

古くは、1932年ロサンゼルス五輪の陸上競技女子百メートル金メダリストだった Stella Walsh がいる。彼女は1990年1月にクリーブランドで強盗に射殺され、検死の結果、ハーマフロダイト（両性具有）と判明した。

また、1934年ロンドン五輪の陸上競技女子八百メートルの優勝者、チェコスロバキアの Zdenka Koubkova もハーマフロダイトと推定された。

さらに、1946年にオスロで開催された欧州選手権の女子百メートル、二百メートル競走のメダリストになった2人のフランス陸上競技女子選手は、その後、男性に性転換して子供がいるという。

第二次世界大戦後にも、1964年に陸上競技女子四百メートルと八百メートルの世界記録を樹立した北朝鮮の Sin Kim Dan について、彼女の父親が息子であると告白したり、1966年女子世界ダウンヒルスキー選手権で優勝した、ドイツの Erika Schinegger は、数回の手術後、性転換し、Erik と改名して男子部門で競技を続行した。

同じく 1966年にブカレストで開催された欧州陸上選手権大会から、女性確認検査が導

入されたのであるが、これを契機に引退もしくは検査拒否した選手たちがいる。

また、1967年の欧州カップ選手権陸上競技女子百メートル優勝、二百メートル準優勝になったポーランドの Eva Klobukowska は、XXYモザイク型のため、女性としての競技が禁止された²⁾（下写真）。



さらに、1985年に神戸で開催されたユニバーシヤード大会に出場したスペインの マリア・パティノ (Maria Patino) は、XY核型で精巢性女性化症候群と判定された。彼女は、自ら告白したこともあり^(注2)、「新聞に書き立てられ、私は陸上競技も、恋人も友人も奨学金も失った」(結城 15:112)という。また、彼女を支援したシャペレ教授は、「性染色体を使う検査は、八百長をしている者ではなく、知らずして体質異常を抱えている女性たちを暴くだけだ」(結城 15:113)と批判した。

した」⁹⁾と報道されている。

また、パッファ（J.C.Puffer）は、「女性確認検査は時代遅れの考え方と宣言して差し支えない」¹⁰⁾と断言しているし、英国陸上競技連盟名誉医事顧問のフォックス（J.S.Fox）も、「情報の機密性は保持すべきであるが、女性確認検査によって失格となった女性達の情報が何一つ公表されていない状況で、国際オリンピック委員会が検査を継続すべきという主張を支持できる証拠はない」³⁾と女性確認検査制度に対する疑義を唱える。

他にも、女性確認方法の決定論拠を検討した国際陸上競技連盟女性確認検査小委員会、女性確認検査に代替する方法として、選手の健康診断を提唱している⁷⁾。また、目崎が「よりよい女性確認法の開発が必要となるが、問題の少ないよい方法はないのが現状である」としつつ、我が国の各競技団体の国際競技連盟（IFs）の規定に女性確認に関する記載があるのは8団体にすぎず、引用した国際陸上競技連盟の女性確認検査の中止についても言及している⁸⁾。

性染色質による検査は、例えば、XXYの場合のY染色体が男性化傾向を示さないことが発見され、性染色質による検査自体の信頼性が揺らいだ背景もあった。そのため、頭

髪による検査が1994年の広島アジア大会で導入され、より厳密に女性確認を実施しようとした¹⁾。

しかし、1990年代から始まる女性の人権運動の流れを受けて、五輪の場では、2000年のシドニーから性染色体検査が廃止されたのであるが、ドーピング検査時の「視認」^(注3)という、かつての女性を確認する方法が復活することになったのである。

Ferguson-Smithらの調査では、国際陸上選手権大会の分析結果、1972年～1990年競技大会から排除された女性選手は13名、500名に1人の割合であると報告しているし、1996年のアトランタ五輪時には、検査対象の3387名の内、8名のY染色体につながる遺伝子をもつと診断されている。

女性確認検査は、1968年の五輪から導入されて、ほぼ30年後の1996年アトランタ五輪までで廃止されただけでなく、次に扱うように、2004年のアテネ五輪からは性転換選手の参加も認められるようになり、今後、男女別競技における「性」をめぐる議論が各方面でわき起こることが予想される。

4. 性転換選手の参加容認

日本においても2004年7月から、「性同一性障害特例法」が施行され、これまで心と体の性が一致しない人の性別変更が認められるようになった。欧米諸国よりもかなりおくれた日本における性同一性障害者の救済には、約30年を要した。つまり、性転換手術をした医師に優性保護法違反の有罪判決、いわゆるブルーボーイ事件(1969年)以来、1997年の日本精神神経学会「性同一性障害に関する答申と提言」が出され、性転換手術を含む治療と正当な治療行為と認められるまでに



30年である。その間、自分の身体に合わせて生活せざるおえなかった人々が、ようやく公式の場で性の転向を求めることができるようになった。

スポーツ界においても性転換を行って、新たな性で大会出場できるようになってきた。

古くは、テニス選手のレニー・リチャーズ（米国）が1974年に性転換手術を受けた後、1977年の全米オープンテニス大会への出場を希望したが、主催者側が認めなかったため、1976年に訴訟を起こした事件がある。裁判の結果、勝訴して大会に出場したと伝えられて



いる¹²⁾（下写真）。70年代当時は、性を変更した後新たな性による大会出場は、彼女（彼）のように訴訟という手段でなければ実現しなかったのである。しかし、それが、徐々に、スポーツ界に受け入れられてきた。例えば、95年に性別適合（性転換）手術を受けて女性になったプロゴルファーのミアン・バガー（デンマーク）が、オーストラリア女子オ

ープンに主催者から招待され、性転換選手としては初めてプロゴルフ大会に出場したり、'96年に男性から女性への性別適合手術を受け、女子のレースに出場しているマウンテンバイクのミシェル・ドゥマレスク（カナダ）もいる¹³⁾。

こうした中、I O Cは、2003年の医事委員会の勧告を受けて、2004年5月、ジュネーブで開いた理事会において、性別適合手術を施された選手のオリンピック出場を一定の条件下、アテネ五輪から認めたのである。五輪参加資格の条件は3つあり、①思春期以前に性転換手術を受けている、②思春期以後は、手術から2年以上が経過して新しい性が法的に承認されている、③性転換後のホルモン治療が検証可能な方法で十分な期間行われていることである。I O Cの承認は、今後、性別適合の手術が増加するとの予想を先取りした形ではあるが、女性から男性への転換、男性から女性への転換には、男女別競技が実施されている状況からは、性別確認や性転換選手の出場是非をめぐって論議を呼ぶ可能性がある。特に男性から女性に転換した場合は、骨格、男性ホルモン、体脂肪率、心肺機能などの面で有利とされ、公平性を懸念する声も出るだろう。

特に、日本において性の変更を認める条件がI O Cのそれよりも厳しいこともあって、ごくわずかな人々しか裁判所で認められてはいないが、今後は、おそらく、性転換した選手がスポーツ界に登場することになるだろう^{（注4）}。

しかし、かつて戦争中、政治的に女性としての競技を強制された男性選手がいたように、今度は、政治的あるいは経済的理由によって性転換が施され、スポーツ界に参入して

くる可能性もある。性転換した選手がそうではない選手よりも競技上、有利になったりする事例が次から次へと起これば、改めて論議となるだろうが、今は人権擁護の御旗が掲げられたばかりである。

5. まとめに代えて

以上の経緯や議論から今後を予測してみると、冷戦構造下、政治的に導入された女性確認検査は、現代の人権擁護思想の推進で認められた、男性から女性へという性転換選手の活躍によって、今度は、人権擁護を訴えた女性（選手）の側から、再度、性転換選手や性染色体異常選手の排除が始まるのではないだろうか。その際には、おそらく選手自身ではコントロールできない不適正な不平等（inappropriate inequality）とは何かを議論しなければならないし、最終的には、「スポーツの平等原則」と「人権擁護」のせめぎ合いとなると考えられる。スポーツ界の性別問題は、I O Cの性転換選手を容認する姿勢が出されたことによって、新たな火だねとなることだけは間違いないであろう。

注

- （注1） 女性確認検査規程の問題については、以下の拙著を参照されたい。
近藤良享：性別はスポーツ団体が決める？. スポーツ倫理を問う（友添秀則、近藤良享共著）大修館書店、東京、73～80頁、2000. および、近藤良享：スポーツにおける女性証明検査規定に関する一考察。体育・スポーツ哲学研究、19巻1号、53～65頁、1997.

- （注2） 女性確認検査の結果は非公開であ

るが、Maria Patino の場合は自らの告白によって検査結果が公表された。

- （注3） 1984年のロサンゼルス五輪の薬物ドーピング検査時に、一部選手による尿のすり替え事例が報告された。そのため、現在は、薬物ドーピング検査のための尿採取時に、すり替え防止のために、係員が立ち会って採取が行われている。だが、この採取時の「視診」は、性染色体検査に移行した理由の1つであり、女性選手に不評だった1966年頃の検査方法が再現されることになった。今後、プライバシー権、検査の厳密性といった新たな難問が登場することになるだろう。

- （注4） 日本においては、性同一性障害のため競艇の女子選手から男子選手へ性転換して、再デビューを果たした安藤大将選手がいる。彼は「問題があった時に議論することにして、とにかくスタートさせることが大事」と話しているという。（西日本新聞、2004. 5. 18.）

参考文献

- ・ 朝日新聞、1993. 11. 23.
- ・ Barnes, L. (1980) Olympic Drug Testing : Improvements without Progress. The Physician and Sportsmedicine, 8-6:23-24.
- ・ Fox, J. S. (1993) Gender Verification-What Purpose? What Price?. Br J Sp Med, 27-3.
- ・ Hay, E. (1972) Sex Determination in Put

- ative Female Athletes. Journal of the American Medical Association, 221-9:998-999.
- Hay, E. (1981) Stella Walsh Case. Olympic Review, 162:221-222.
 - Hay, E. (1988) Femininity Controls in the Olympic Games. (In) Sports Medicine in Track and Field Athletics, 2nd Medical Congress International Amateur Athletic Federation (1987), p. 49.
 - Ljungqvist, A. & Simpson, J. L. (1992) Medical Examination for Health of All Athletes Replacing the Need for Gender Verification in International Sports. JAMA, 267-6:850-852.
 - 目崎 登 (1997) 女性スポーツの医学。文光堂：東京。 p. 246.
 - 日本経済新聞、1992. 6. 1
 - 越智貢、金井淑子、川本隆史、高橋久一郎、中岡成文、丸山徳次、水谷雅彦 (編) (2004) 岩波応用倫理学講義 5 性／愛。岩波書店：東京
 - Puffer, J. C. (1996) Gender Verification : A Concept Whose Time Has Come and Passed?. Br J Sp Med、 30-4.
 - Physician & Sportsmedicine (ed.) (1976) Tennis is Vehicle for Dr. Richards' Crusade. The Physician and Sportsmedicine, 4-10:15-16.
 - スポニチ、2003. 11. 15.
 - Turnbull, A. (1988) Woman Enough for the Games?. New Scientist、 15 September.
 - 結城和香子 (2004) 第4部 女の戦い6。屈辱の性別検査。『オリンピック物語～古代ギリシアから現在まで』中公新書、111-123 頁